野間邸の火事見舞い礼状

理事　川嶋　伸行

昔の新聞や雑誌などを調べていると、断片的ではあるものの興味深い記事も多く、掲載誌や表題だけでも記録・整理しておくことは、必要な作業であることを痛感します。

「上毛及び上毛人（上毛郷土史研究会）」は大正から昭和初期にかけて発行された歴史研究誌ですが、短信の地域情報も貴重な記録となっています。

昭和十二年五月一日号では△東京便りとして玉生が根津嘉一郎、野間清治、大澤菊太郎の消息を伝えています。端的に当時の野間清治の近況を表しているのでご紹介します。（漢字は一般的な漢字に変更）

雑誌界の覇王　野間清治氏

氏が社長たる小石川区音羽町の大日本雄辯会講談社は数年来より数百万円の巨費を投じ理想的頗る美麗の大建物を先年落成し千数百名の社員、従業員が一心同体に活躍努力し目を廻す程の多忙振りを示して居る、例の九大雑誌は八百余万部、単行本の数百種も間断なく刊行せられ、何れも好評沸くが如く忽ち飛ぶ如くの売れ行きである、氏は外に報知新聞社長として同社を主宰し、暴撃的猛進で所謂誌上教育家としても一大貢献ある崇高の人で、東京府第一の多額納税者である、氏の本邸同区関口台町で、有名にして宏大なものであって、同家の庭園内にある芭蕉庵は俳聖芭蕉が初めて江戸に上った際、仮寓したところで、現在では東京都の史跡に指定された由緒ある所であるが、三月三十一日午後二時頃留守居番の不注意から物置小屋から発火して、怨ち焼失したのは返すがえすも残念であるが、之れと寸分も違はないものを再建する計画の由、因に庭内失火の際読者、得意、知己其他の方面からの見舞状山をなした有様であったので、一般に対した左の陳謝挨拶の葉書を発信した。

前略　此度芭蕉庵失火の際は早々御見舞に與り御親切の段誠に難有厚く御禮申上候、可惜記念の名庵を灰燼に帰し何共天下に申訳無之、何れ旧蹟に則り永く後世に傳へる方法相講じ度存念に有之候間御諒察下され度候先は不取敢乍略儀書中右御厚禮申上度如斯御座候

草々

四月　日

小石川区関口台町二九

野間清治

台湾台北市に住んでいる時、我が家にある日陸軍の若い将校が訪ねて来た。千葉の佐原中出身とのこと、小生の父も佐原中出身なので喜んで歓待した。その将校は台北に赴任する時、どなたか台北に知っている人はないかと佐原中の卒業生名簿から、父を探し出して、訪ねて来たのである。三～四回、自分の休みの日など遊びに来て、佐原の町や佐原中のことを語りあっていた。

その頃太平洋戦争がはじまった。ある日その将校が、大きなトランクを持ってやって来た。「自分はこれから軍の命令により南方に行く。自分の一生の宝物は持って行けないので、ぜひこの家に預かってくれ」とのこと。

一応我が家で預かった。それから間もなく敗戦。我々台湾在住の日本人はすべて、日本本土に引き揚げることになった。引き揚げの時持って行く物はきびしく制限されたので、例の将校のトランクは持って帰れない。

で、おっかなびっくりあけてみた。何か持って帰れる物があったらと思って。出て来た物は驚いたことには、講談社とその社長野間清治氏と社長の家族及び職員全員の大きな写真のアルバムと講談社につとめていた時の思い出というか、出来事をつづった「メモ」みたいな物だった。

講談社物語

トランクの中

雨宮　清

それこそトランク一ぱい出て来た。講談社とはあまりにもなつかしい社名なので、びっくりしてその写真とか作文集を真剣に読みだした。

講談社!!

この位なつかしい名前は小生にとってない。気が遠くなる程なつかしい名前である。そう、小学六年生卒業とともに講談社の発行する少年クラブと別れてもう何年にもなる。かつて少年クラブくらい日本の少年をとりこにした本はない。懸賞問題も何十回も出した。だから講談社の小石川音羽町の住所は今もおぼえているし、社長の名前も家族の名前も皆覚えていた。